

# ウズリす



УзРис

文部科学省選定  
「私立大学研究ブランディング事業」

立正大学ウズベキスタン  
学術交流プロジェクト  
ニュースレター

2019.12  
第4号



**調査活動報告** 2019年8月、9月ウズベキスタン学術調査隊

**よみちりサーチ1** ウズベキスタンの墓地 (3)

**よみちりサーチ2** ウズベキスタンでいただきます

**特別寄稿** タシュケント・日本人墓地墓参報告

**本の紹介** ミリンダ王の問い インドとギリシアの対決 1・2・3  
シルクロードの秘密国 要衝ブハラ

**博物館みて歩き** サマルカンド・アフラシャブ博物館  
ルーダキー記念歴史・郷土史博物館

**みやげばなし** ウズベキスタン・テルメズの歴史的建造物の紹介

# 調査活動報告

2019年8月、9月ウズベキスタン学術調査隊

調査隊の活動は、いよいよズルマラ仏塔創建の背景を探ることに重点を移した。ただし仏塔には大きな割れ目が入っており、近接した場所の発掘は慎重でなければならない。まず塔から少し離れた場所を試掘し、周辺の遺構を探ることとなった。

立正大学文学部 講師(博物館学)、調査隊隊長 **紺野英二**

専門は考古学、南武蔵の古墳。おすすめはスイカとメロンと青い空。トマトも美味しい。



フランス隊との交流

## 報告

今回の調査活動は、主に以下のことを目的として渡航しました。

1. ズルマラの周辺調査（試掘による塔周辺建物跡の確認）
2. 気象観測装置のケーブル交換
3. 活動の情報発信および取材（TV撮影、Facebook、本誌等）
4. 本学教員による日本文化講演会（於テルメズ）

今回はズルマラ周辺の発掘調査の範囲を広げるため、例年より長めの期間をとりました。発掘調査については、岩本篤志隊長が、発掘のための草刈りおよび表土掘削などテルメズ大学側と事前調整を行いました。ウズベキスタン側のコーディネーターは、テルメズ大学のシャプラト・シャイドラエフ氏です。

テルメズ大学の夏期休暇が終わる8月末前に作業を開始したことで、学生に発掘作業に参加してもらうことができました。同大では、2019年9月入学生より「考古学」の学科（専攻）が設立されたとのことで、今後ますます交流が盛んになることが期待されます。また、ウズベキスタン科学アカデミーのアクマル・ウルマゾフ氏が調査に全日参加してくれました。

調査隊は、8月26日にテルメズに到着しました。まずは、ズルマラ仏塔の現況確認と周辺の踏査を行いました。

当地における発掘は、ウズベキスタン共和国文化省の許可が必要ですが、到着時は許可が下りていませんでした。テルメズ大の説明では8月27日に許可が下りるとのことで、26日と27日には、同大によって現地での下準備がおこなわれました。

27日には文化省から正式な許可があり、28日より発掘作業を開始しました。発掘に参加した学生はほんの数日間ですが、発掘作業の大変さと遺物発見時に注意すべき事項を学んだようでした。貴重な遺物を発見した時には感動した様子でした。

今回の発掘調査では、土層断面の確認、ズルマラ仏塔の基壇構築面の把握を目的として、仏塔の東側と南側にトレンチを設定し、地表面より2m50cmを目指して掘削し、基壇の構築面と推測される層を確認しました。結果として塔は現況の地表よりも2m以上地下まで埋まっていると考えられます。全13日間にわたる今回の発掘調査の期間中に1,000点以上ののぼる土器片と数十点の焼成レンガ、9点のコインを発見できました。コインのおおかたはクシャーン朝期のものと考えられます。また、仏塔周囲の装飾に使用したと想定される石灰岩製の装飾も数点見つかりました。

9月10日には「本学教員による日本文

化講演会」の企画で、池上 悟(本隊副隊長)が、「日本出土の中国鏡について」を演題として、講演しました。100名近く集まったテルメズ大学の教員や学生から多くの質問が寄せられました。

今年度は、本学仏教学部の海外仏教文化研修が、ウズベキスタン・タジキスタンを訪問地としており、ズルマラ仏塔周辺の発掘調査にも見学にこられました。研修参加者約20名に対し、私が発掘の経過について説明を行いました。調査継続への期待の声をいただきました。

調査隊に同行したBSフジ「ガリレオX」の取材班は、芸術学研究所の所長、ショキルジョン・ピダエフ氏にカラ・テペ遺跡の壁画発掘に関するインタビューを行いました。内容はBSフジ「ガリレオX」をご覧ください。



池上先生の講演会の様子

## 日程概要

凡例（敬称略、前出・本号執筆者の所属略）

- 1…池上悟・紺野英二・高橋杜人
- 2…本間岳人(池上本門寺霊宝殿学芸員)、池田奈緒子(本学博物館 嘱託)、木村藍人(本学文学研究科 院生)
- 3…安田治樹(本学仏教学部教授、調査隊隊長)、岩本篤志
- 4…今村栄一(名古屋大学アジアサテライトキャンパス学院プロジェクト調整員)
- 5…森口郷志(TV制作(株)WAC)
- 6…アクマル・ウルマゾフ(ウズベキスタン科学アカデミー芸術学研究所研究員)

8/25(日)

1 タシュケント：入国(仁川経由)

8/26(月)

1 タシュケント → テルメズ：飛行機

8/27(火)

1：テルメズ大学側と打合せ。その後、ダルヴェルジン・テペ、日干し煉瓦製作所、ジャルクルガンのミナレット見学

8/28(水)

1 6：発掘作業開始。カンピル・テペ遺跡見学

8/29(木)

紺野、高橋：現場作業。6、池上：遺物実測を担当

8/30(金)

1 6：発掘作業、遺物実測

8/31(土)

1 6：発掘作業、遺物実測

9/1(日)

独立記念日。1 6：カラ・テペ、ファヤズ・テペ、シェラバードのボゴ・テペ見学

9/2(月)

休日。1 6：各自整理作業。打ち合わせ

9/3(火)

1：ズルマラの気象観測装置よりデータ回収、ケーブル交換。キルクギズ、コキルドルオタハナカ見学。遺物洗浄

9/4(水)

調査再開。1 6：発掘作業、遺物実測

9/5(木)

1 6：発掘作業と遺物実測

9/6(金)

1 6：発掘作業と遺物実測。夕方、フランス隊とともに大学関係者のパーティーに招待される

9/7(土)

1 6：発掘作業と遺物実測



発掘調査風景

9/8(日)

遺物洗浄。12時で作業終了

2 4 5 タシュケント：入国(仁川経由)

9/9(月)

1 6：発掘作業。ウズベキスタンのTV番組が取材

2 4 5 タシュケント → テルメズ：飛行機

3：仏教学部の研修一行とテルメズ到着。9/6から同国内に。

9/10(火)

ズルマラの発掘作業と遺物整理に分隊。研修一行と1～6全員で記念撮影。午後、池上、テルメズ大にて講演会

9/11(水)

4、木村、紺野、高橋：現場作業。本間、池田：遺物整理。池上、3 タジキスタン：入国(デナウ経由)

9/12(木)

現場作業。5：遺跡の取材。ドローンによる撮影

9/13(金)

高橋、紺野、2 4 5：現場作業

池上、3 タジキスタン国内 → サマルカンド：バス

9/14(土)

研究者の館でコイン撮影。片づけ。午後、高橋・紺野、2 4 5 テルメズ → タシュケント：飛行機。3、池上 サマルカンド → タシュケント：バス

9/15(日)

2、紺野、高橋 タシュケント ⇄ サマルカンド：アフラシャブ号往復。チムール廟、レジスタン広場、アフラシャブ博物館、シャーヒ・ズインダ廟見学

9/16(月)

2、高橋：博物館探訪

3 4 5、池上、紺野：芸術学研究所訪問。4 5：ピダエフ氏取材。3、池上、紺野：在ウ日本大使館で活動報告。3 5、池上、紺野：文化省副大臣アキロヴァ女史と遺跡保存と観光について意見交換。安田、高橋、2：帰国便へ

9/17(火)

安田、高橋、2 成田：帰国(仁川経由)。池上、岩本、紺野：調査概要確認、打ち合わせ。書店、チョルスバザール、ミングウリク遺跡、コクテペ遺跡見学。帰国便へ

9/18(水)

池上、岩本、紺野 成田：帰国(仁川経由)



# ウズベキスタンの墓地(3)

## ～サマルカンド：シャーヒ・ズィンダ廟群の隣接墓地

立正大学文学部 教授(考古学)、調査隊副隊長 **池上 悟**

専門は仏教関係遺跡・遺物などの研究。ウズベキスタンには、子どもが多く、仕事を手伝っているのをよくみかけます。

世界各地に営まれた墓地は、それぞれの民族性を反映しています。欧州ではローマ時代に起源する墓石型式が採用されており、中央アジアではイスラム教の広まった地方に独特の墓石が考案され、20世紀以降に普及しています。

### 墓地の立地

ウズベキスタンの古都であるサマルカンドの北東部に、世界遺産のシャーヒ・ズィンダ廟群が所在しています。廟群は、11～19世紀の間に建設された20以上の建物が残っています。このうちの主体を占めるのは、ティムール朝に建設されたものです。

ティムール帝国は、中央アジアのモンゴル系の軍事指導者であったティムール(在位：1370～1405年)によって建

国されました。アムダリヤの支流のザラフシャン川の河岸に占地するサマルカンドは、1220年にモンゴル軍により破壊された旧都のアフラシアブの南側に建設されており、ティムール帝国の首都として14～15世紀に繁栄しました。

シャーヒ・ズィンダ廟群は、サマルカンド郊外のアフラシアブの近く、東に開く谷奥の南斜面に建設されており、20以上の建物がドーム形の通路で結ばれています。ティムールおよびその家族の霊廟としてはグーリ・アミール廟が建設されています。

シャーヒ・ズィンダ廟群の所在する丘上には、大規模な墓地が形成されています。聖地に埋葬されることを望む民衆は、世界の各地のいつの時代にも認められます。

ここに認められる墓に建てられた墓標は、1類・煉瓦積みのもの(写真①)、2類・石板を鉄枠で支えるものが基本的には古く、1類は1944～1989年、2類は1985～2000年の年号が確認できます。

また新規の墓標型式の採用は、従来土葬した土饅頭をそのまま留めることが多かったものが、埋葬部を縦長に石材で囲う欧州風の墓地造営と一体となって採用されていることが確認できます。

### 墓石の様相

この墓地には更に、ウズベキスタンの他の国内墓地にはほとんど確認できない特異な形状の墓標が確認できます。

1つめ(写真②)は、高さ200cmほどの頂部を丸みをもって2段に尖らせた板状の墓標であり、長方形の板石を中心に、10例ほどの資料で1971～1985年までの年号を確認することができました。

2つめは、数例の確認に留まりますが、1つめの発展形と考えられる全体を厚さ10cmほどの板石で製作するものであり、



シャーヒ・ズィンダ廟群と墓地



シャーヒ・ズィンダ廟群隣接の墓地



煉瓦積みの墓標：写真①



頂部を2段に尖らせた墓標：写真②



墓石屋に立てかけられた墓石



シャーヒ・ズィンダ廟群(奥側に墓地)

頂部は一段狭めて突出させる形状を呈しています。

この墓標形状は、欧州とくには英国の都市部の墓地に多く認められる墓標型式であり、移入型式とも考えられるものです。

墓地の一角には、墓石屋が営業していました。壁に墓標に使用する石材が立てかけられています。建物の裏庭では台を置いて作業する状態が確認できました。

立てかけられた墓標は、頂部の片側が尖ったもの、頂部が曲線的なもの、

頂部が曲線を呈するもの、全体が正方形を呈するもの、頂部が丸く両側面も曲線をもってする最新の型式の未成品が認められました。

現在主体をなして墓地に建立されている人物像を表した長方形を基本とする板状の墓標のみではなく、新たに創出された墓標型式の存在を示すものとなっています。

裏庭で製作中の墓標には、両側を曲線的に仕上げた新式墓標、さらには長方形の横型と考えられる墓標が認められ、日本を含め世界各地で現出して

いる高さの低い横型墓標の普及の一端を確認できます。

各国の墓石型式は、それぞれの伝統を踏まえた形状を採っていますが、頂部を円形に仕上げた扁平板材はGrave Stoneの簡略形の基本として、ローマ時代から使用されています。その変容形としての2段ないしは3段に頂部を突出させる形状も各国で認められますが、先端を尖らせた形状はモスクの尖塔を想起させます。古くは扁平自然石ないしは割石をもって製作されたイスラムの墓石も多様化しています。



# ウズベキスタンでいただきます。 in テルメズ

立正大学文学部 講師(博物館学)、調査隊隊長 **紺野英二**

専門は考古学、南武蔵の古墳。おすすめはスイカとメロンと青い空。トマトも美味しい。

さまざまな文化の交わる中央アジア。調査隊の活動拠点としているテルメズ市は、ウズベキスタンの中でも南に位置し、その気候や風土も首都タシュケントとも少し異なるものです。今回は、人間活動に欠かすことのできない食事のメニューから、文化の交流を紹介したいと思います。



オリーブとレモンを入れたグリースキーサラダ。今期は、タイスキー、ペキンなどの味が登場。ちなみにヤボンスキーは、醤油味



目玉焼きを乗せた焼きラグマン。目玉焼きは、店がアレンジしている



テルメズで食べたアイス。メロンかとおもいきや、ピスタチオ



リゾットのようなマスタバ



ウズベキスタンのビール、サルバースト。定番のビールです



塩味の美味しいラブシャ



サマルカンドのプロフ。混ぜないのが特徴。この店では、肉を別にして持ってきます



サマルカンドプロフ



サマルカンドプロフをつくる鍋。外での調理で匂いにつられてお客が絶えない

## ウズベキスタンの食事

「文明の十字路口」と表現されるほど中央アジアには多彩な人種、言語、文化が混在しています。道行く人びとを見ても、ロシア系、ペルシャ系、東アジア系などさまざまです。それは食事を見ても同じことがいえます。ナン(パン)を食べる小麦粉文化と、米食文化の両方が混在していることから、東西と南北の食文化の交差点ともいえるでしょう。

中央アジアの食事を紹介した書籍では、『ユーラシア・ブックレットno.172 美味しい中央アジア 食と歴史の旅』(先崎将弘、東方書店 2012) など\*があります。

ウズベキスタン共和国では、中央アジアの他の国々と同じく食事に関してはロシアの影響が強いようで、昼食をメインとする考え方などにもみえます。現地の人の意識にもそれは現れていて、「プロフ(ピラフ)は昼食に食べるもの(昼はしっかり食べる)」「夜は軽めにする方

が良い」などと言われます。

食事のしきたりにもそれは反映しています。1日三食のなかのメインである昼食を例にあげると、まず前菜にサラダとナンを注文し、次にスープを食べ、肉料理(メイン)となります。

肉料理は、鶏や牛も食べますが、やはり羊肉がよく食べられ、シャシリク、チョポンチャなどの料理があります。また、食事の際には、チャイ(お茶)をよく飲みます。彼らはイスラム教徒ですが、一部の人はお酒(ウオッカやビール)を飲んだりもします。

## さまざまなスープ

ここでは、スープについて紹介します。スープには、ボルシチ、ラグマン、ラブシャ、シュルパ、マスタバなどがあります。ボルシチはロシア料理のイメージが強いですが、ウクライナの伝統料理といわれ、ポーランド、ルーマニアなどでも食されています。また、ラグマンは、トマトベースのスープに「うどん

のような麺を入れたもので肉、パプリカ、ニンジン、ジャガイモ、玉ねぎなどが入り、トッピングに香草をのせています。ラグマンは、「拉麺」を語源とするところからわかるように、中国を起源とする麺料理です。その影響を受けたウイグル族が伝えたものといわれます。ラグマンには、スープのないものもありますが、前者を「ウイグルラグマン」とよび区別しているようです(現地ガイドは日本の焼きうどんのように「焼きラグマン」と説明してくれます。こちらは、食堂のナポリタンのような懐かしい味がします)。同じ麺料理でもラブシャは、塩味がベースのスープに「そうめん」のような細麺と鶏肉を入れたもので、非常にあっさりした味付けのものです。私たち日本人のほとんどがウズベキスタンに行くと、胃腸が弱ってきます。ラブシャは、羊肉の脂で胃腸が疲れたと思ったときにオススメです。また胃腸が疲れた時にはマスタバ(米と野菜のスープ)やシュルパ(肉野菜スープ)も良いかもしれません。ほかにも水餃子に似たペリメニ、テ

フテル、ピクテルマなどのスープがあります。

しかし、テルメズのウズベキスタン料理には、注意しないといけないこともあります。それは、ウオッカの飲みすぎと油です。テルメズではどの料理も油の量が多めです。プロフや焼きラグマンなどの油の量は特に多めに感じられます。

暑い夏場でも食事の際には熱いチャイを飲み、油を腸に流してしまうことをオススメします。

\*この地域の料理を紹介したもので、先崎さんの著書のほか、荒木肇さんの『ロシア料理・レシピと食文化』、『ロシア料理・その2-中央アジアからバルトまで』(ユーラシア研究所編、東洋書店)などがあります。また、帯谷知可さんの『ウズベキスタンを知るための60章』(明石書店 2018)にも紹介されています。



サマルカンドのお土産屋、一部骨董品も



特別寄稿

# タシュケント・日本人墓地墓参報告

## 仏教学部海外文化研修に際して

立正大学仏教学部教授(仏教史)、  
海外文化研修副団長

寺尾英智

専門は日本仏教史、日蓮教団史。西瓜、メロン、  
ブドウ、杏子、何れも美味。果物の宝庫です。

仏教学部では、国内・国外の仏教関連の故地や遺跡などを巡検する国内仏教文化研修・海外文化研修を行ってきました。研修は平成6年より正規の科目として設定され、26回を数えます。本年は、9月6日～17日の日程で本学の学術調査隊・学術交流プロジェクトが進められているウズベキスタン、並びに隣国であるタジキスタンの仏教遺跡を中心に巡りました。

ウズベキスタンには、第二次大戦後にソ連に捕虜として抑留され、現地で亡くなった日本人の墓地が複数存在します。首都タシュケントの西郊にあるヤッカサライ墓地は、その中でも最も重要なものです。私たち研修団一行は、9月15日昼前に墓参しました。この墓参は、ウズベキスタン国立歴史博物館及び科学アカデミー芸術学研究所の見学と共に、タ

シュケントにおける主要な日程の一つです。

墓地の入口前には、日本人抑留者資料館があります。同館は、地元の実業家ジャリル・スルターノフ氏が私財を投じて開設したものです。また近年には入口横にモスクも建設され、祈りの時間には駐車場も満杯になります。この墓地は、地元の人々の墓地として造営されたものです。葬法は土葬ですから、一つの墓ごとに一人が埋葬されており、現在も新たな墓が営まれています。

入口から参道を進むと、最も奥まった一角に日本人墓地がありました。敷地は柵で囲われており、鎮魂碑が建立され、桜が植えられるなど、きれいに整備されています。整然と並んだ埋葬者の伏碑（長方形）には、それぞれ氏名が漢字で

読経中に線香を手向ける



読経する団員



日本人抑留者資料館



墓地入口にあるモスク



刻まれています。出身地の都道府県名も刻まれていましたが、当然のことながら戒名（法名）などは一つもありません。

ウズベキスタンで逝去された抑留者は総計884名に及び、日本人墓地は13箇所あります。墓地の奥にある1995年に建立された鎮魂碑によれば、各墓地の埋葬者数は

タシュケント ヤッカサライ墓地 79名

タシュケント地区墓地 8名

アングレン 墓地 133名

フェルガナ 墓地 2名

ボスタンディクスキー

ボスタンディクスキー墓地 13名

ベガワート 墓地 146名

チュアマ 墓地 32名

カガン その1墓地 7名

その2墓地 153名

コーカンド 墓地 240名

などです。1990年にヤッカサライ墓地に「永遠の平和と友好不戦の誓いの碑」が建立されます。次いで1991年のソ連崩壊後、タシュケントとアングレンの墓地整備が進められます。何れも福島県の民間団体によるものです。さらにウズベキスタン政府の負担により、2002年春には13箇所全ての墓地の整備が完了したのです。

墓参では、持参した線香などを準備し、副団長の寺尾が

導師、仲澤浩祐名誉教授が協導師、内藤善之法華経文化研究所研究員が金座を勤め、団員一同で読経・唱題して法要を営み、当墓地並びにウズベキスタン各地に埋葬された霊位の冥福を祈りました。読経中には、安田治樹団長以下、全員で線香を手向けることができました。戦争による様々な惨禍と苦難に思いを致し、それぞれが厳粛な時間を過ごせたのではないかと思います。法要の後、墓地に到着した時に清掃をしていた男性（長年に亘り父親と共に日本人墓地の墓守をしてきたミラキル・ファジーロフ氏）にお礼を述べ、墓地を後にしました。

同日の夕方には、日本人抑留者が建設に関わったアリシエル・ナボイ劇場を見学しました。側壁には「1945年から1946年にかけて極東から強制移送された数百名の日本国民が、このアリシエル・ナヴォイー名称劇場の建設に参加し、その完成に貢献した。」との銘文が三カ国語で掲げられていることで有名です。この様な中でも、墓地の整備と共に、苦難の中で異国の地に亡くなった方々の顕彰を見ることができました。

\*日本人墓地については寺山恭輔「ウズベキスタンにおける日本人抑留者・日本人墓地」(帯谷知可編著『ウズベキスタンを知るための60章』明石書店、2018年)、池上悟「ウズベキスタンの墓地(2)～タシュケント・YAKKASARAY墓地」『ウズリず』第3号、2019年)に詳しい紹介があり、参照しました。

\*スルターノフ、ファジーロフ両氏の長年の功勞に対し、日本政府は叙勲しています。在ウズベキスタン日本国大使館ホームページ参照。



1990年建立の碑



1995年建立の碑



アリシエル・ナボイ劇場

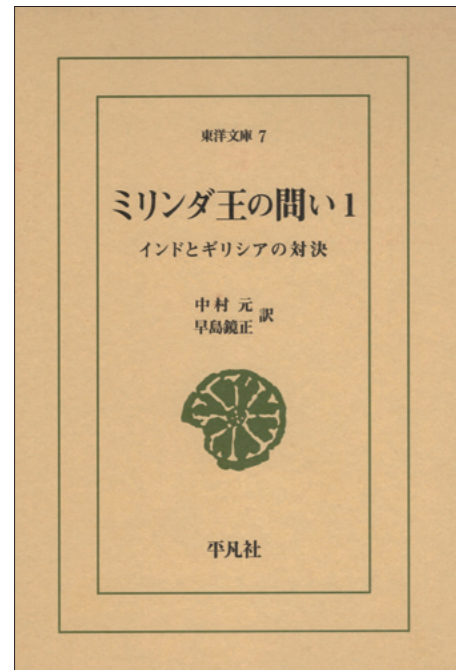


清掃するファジーロフ氏



墓地の奥から前方を望む





## ミリンダ王の問い インドとギリシアの対決 1・2・3

中村元・早島鏡正 訳・解説

平凡社（東洋文庫 7・15・28）  
1963年11月～1964年10月 初版第1刷



## シルクロードの秘密国 要衝ブハラ

前嶋信次 著

〈シルクロード叢書〉芙蓉書房  
1982年刊

### 釈尊滅後・仏像出現以前の仏教にギリシア人は何を考えたか

立正隊が発掘してきたバクトリア地方のカラ・テベ寺院遺跡は、ウズベキスタン科学アカデミーのピダエフ教授によれば、1世紀後半頃から造営が始まったとされる。2016年に発見された壁画は2～3世紀のものらしい。

歴史を遡るが、前4世紀のアレクサンドロス大王の東征はギリシア人の東方移住を盛んにし、やがてここバクトリアの地には、前255年頃～前139年頃にグレコ（＝ギリシア人の）バクトリア王国が栄えた。王国は第8代王の時に滅んだが、アジアにいたギリシア人すべてが滅亡した訳ではない。

実は第4代の王が、前2世紀初めから西北インドとガンジス流域への侵入を開始し、その地の後継者らはインドに諸王国を建設していた。これを総称してインド・ギリク（インドのギリシア人）諸王国といい、バクトリア本国とは異なる歴史を歩んだ。中でも前2世紀半ばに現れたメナンドロス王（インド風の呼称でミリンダ）は最大の勢力を築き、都をシャーカラ（パンジャブ地方のシ

アールコット）に置いた。彼のコインは、西はカーブル（アフガン）から東はマトゥラー（中インド）まで広大な地域で発見されている。

インド・ギリク諸王国はやがて北方遊牧民によって前1世紀末までに滅ぼされた。かたや後1世紀初めにバクトリア地方で勃興した遊牧民によるクシャーナ朝は、2世紀半ばに即位したカニシカ王のもとで北インドに進出し、征服した。かのカラ・テベ寺院は、クシャーナ朝治下で造営され発展したものである。

ここに紹介する書籍は、先のインド・ギリク最盛期の王ミリンダ（メナンドロス）と仏僧のナーガセーナ長老との問答集である。パーリ語で『ミリンダパンハー』と呼ばれ、複数のテキストが伝わっている。この経の原型の成立は概ね前1～後1世紀頃とされ、やがて付加増広されていった。漢訳の『那先比丘経』はその古層部分に当たる。

ギリシア人であるミリンダ王は、強勢であっただけでなく、さまざまな学問も修めていた。哲学的な問題にも関心を

持っていたようである。そこで仏教をいまだ深くは知らぬ王が、その教理に関する疑問を率直に、繰り返して問うている。それまで王の深く鋭い質問に太刀打ちできる者はなかなか現れなかったが、ナーガセーナはすべての問いに答えて疑問を氷解させた。王の関心は、名称と実体（人格的個体）の関係に始まり、我と無我の問題が中心にあった。ことに無我と輪廻の関係に関する回答にはなかなか納得できなかつたらしく、繰り返して問うている。

ここに生々しく見られた仏教弘通の様相は、いまだ仏像も創られていない時代のものである。偶像のない中で、むき出しの精神の衝突から、初めて核心的な理解と融和が生まれている。信仰における凄絶な一面でもある。このような仏教が200年後のカラ・テベにも流れ込んでいったのであろう。

立正大学仏教学部 教授  
(東洋史・仏教史)、調査隊隊員  
手島一真  
専門は中国南北朝隋唐時代の仏教・宗教社会史。アレクサンドロスも通った鉄門址は必見。ビーツのヨーグルトサラダはピカイチでした。

### ブハラ ブハル ヴィハーラ

本書は同名の書籍（1972年）の新装版で、ブハラの町を中心にその歴史を記したものである。ブハラの名前は、ブハル（学問の中心）、またはヴィハーラ（寺）に由来するとされる。ブハラのマゴキ・アッタリモスクの床下の拝火教神殿の更の下に仏寺址が確認されたとする報告にもとづき、著者はヴィハーラ説を推している。

ウズベキスタン共和国の独立（1991年）以前の書籍なので、現在と様相を異にする描写もあるが、ブハラを中心とした地域の歴史や建築物について知るには今でも十分役立つ。またサーマーン朝やカラハン朝といった日本では知名度が低い王朝やその文化・建築物にも含蓄のある説明があって、ガイドブックでは物足りない人にもおすすめできる。

著者は「秘密国」「ブハラ」を対象とした理由を、この町がシルクロードの要衝でありながら、ある時期には固く閉ざされていたことをあげている。また筆者は各政権を紹介する際に、数々の陰謀や怪人物に言及しており、それが一

層、秘密めいた雰囲気を実際立させている。現在のウズベキスタンは観光地化がすすみ、そうした雰囲気はなくなりつつあるが、本書を通してその感触を知れば、現地を訪れた際に発見があるにちがいない。

本書は全13章で構成されている。以下に概要を記しておく。

第1章ではソグド以前、第2章では、ソグド（ワラフシャ）、そしてウマイヤ朝のクタイバによる征服が記され、第3～4章では、サーマーン朝やカラハン朝について記述がさかれる。両王朝は、拠点がおかれたブハラだけでなく隣国タジキスタンとの関係も深く、いずれでも街中の建造物、銅像、博物館の展示等にそれが反映されている。また、第3章ではサーマーン朝の詩人ルーダキー（859～941）に、第4章では近代の文豪アイニー（1878～1954）の紹介がされる。ザラフシャン河沿いの地に生まれた二人は、タジキスタンでは国民の象徴的存在である。なお、ルーダキーについては、加藤九祚『中央アジア歴

史群像』（岩波新書）にも頁がさかれている。

ついで第5～6章では、チンギス・ハーンとハイドウによる侵攻とブハラの対応・復興が描かれる。またマルコ・ポーロやイブン・バトゥータの記事から当時のブハラが描写される。第7章では、チンギス・ハーンの末裔を称したチムールとその孫ウルグ・ベク、その一族で、ムガル帝国の礎を築いたバーブルにふれている。第8～13章はウズベク族のシャイバーン朝、アストラハン朝、マンギット朝といったブハラ汗国とその王たちの紹介、そして最後にマンギット朝下の閉ざされたブハラへの潜入を試みた探検家や英・露の諜報活動が、主として英国側の記録によって紹介される。

本書はすでに絶版ではあるが、比較的多くの図書館に所蔵される。

立正大学文学部 准教授  
(東洋史)、調査隊隊員  
岩本篤志  
専門は内陸アジア史、中国南北朝隋唐史。現地にはレトロな車、LADAがたくさん走っています。

# サマルカンド・アフラシャブ博物館

立正大学文学部 准教授  
(東洋史)、調査隊隊長

**岩本篤志**

専門は内陸アジア史、中国南北朝隋唐史。  
現地の食事はプロフとラブシャがおすすめ。

ウズベキスタン  
サマルカンド



アフラシャブ博物館は、1970年に開館した。市の北東部に残るサマルカンドの都城址「アフラシャブの丘」を横切る道路脇に位置しており、シャーヒ・ズィンダ廟群やウルグ・ベクの天文台跡にも近い。博物館の入り口に掲げられた2羽の鳥に挟まれた「2750」はサマルカンドの歴史の長さを示している。サマルカンドの都城は、前6、5世紀頃から建設が始まり、ソグド人の康国の中心として繁栄し、最後は13世紀のモンゴルの来襲によって破壊された。その後の14世紀のイブン・バットゥータの記録には、廃墟の宮殿が残るサマルカンドの様子が描かれているが、19世紀にはただの丘陵と化していたようである。「アフラシャブ」とは『シャー・ナーメ』の伝説的英雄に由来し、17世紀頃から遺跡址の呼称として用いられてきたという。

この博物館で最も注目される展示品は、アフラシャブの丘の宮殿址から出土した大広間の四方に描かれた壁画で、

サマルカンドのワルフマン王と各国使節等が描かれている。

博物館は、中心にある壁画展示の部屋とそれを囲む部屋（回廊部分）とで構成される。2019年春に、壁画の部屋脇の小部屋に解説ビデオを放映するシアターが設置された。つまり、博物館としては、第1に回廊部分（入り口を入れて左側から）の展示、第2にシアター、最後に壁画展示の部屋と言う順路を勧めているらしい。



では回廊部分から展示物のいくつかを紹介していくことにしよう。まず発掘

の歴史を物語る資料が展示されている。ソ連科学アカデミー、ウズベク共和国、またフランスとの合同発掘調査に関する写真や資料などである。つづいて、数々の出土品が展示されている。ソグドの王統を編年する際、指標となった各種ソグド銭のほか、テラコッタの人形、ゾロアスター教のかまど、オッサリ（蔵骨器）など、日常生活に関わるものが多い。いずれもソグド関連の遺物の展示としては、展示品数・質ともに他館をしのぐものである。

主要展示といえる宮殿址の壁画は、1965～1968年にウズベク共和国アカデミーによって発掘された。主題のワルフマンとは、7世紀後半のサマルカンドの王で、中国側の史料では、唐の高宗から康居都督府の都督にも任じられた「拂呼縵」がその人とされる。壁画は、いくつかの場面で構成され、ひとつは王のもとを訪れた諸国の使者やサマルカンドと密接な関わりがあった西突厥や



アフラシャブの壁画（西壁のマスクをした人物、ゾロアスター教の神官とみられる）



アフラシャブの丘（壁画が発掘された付近）



アフラシャブ博物館入り口の「2750」



遺跡調査の歴史紹介コーナーより



オッサリ（ゾロアスター教の蔵骨器）

唐との関係を示すと見なされている。個々に記された各国使節の服装は、7～8世紀頃の各国史においても貴重な史料とされており、ソグド文字が書き込まれた人物像や動物像もある。西壁のマスクをした人物の服の裾には、バクトリア文字とソグド文字が書かれ、その人物がチャガニアン（デナウの南の地域、ダルヴェルジン・テベも含まれると

思われる）からの使節であることを示しているという。そのほか西壁には服装やかぶり物からみて高句麗あるいは新羅の使者と思われる者も描かれており、東西交渉史における重要資料であることは疑いをいれない。

なお、新設されたシアター室には、20人程度が入り、壁画に関する各国語（日本語版あり）のビデオでわかりやす

く紹介がなされている。

さらに博物館左側の駐車場奥の鉄の壁に扉があり、そこからアフラシャブの丘に入り、遺跡の様子を見ることができる。扉の脇には、遺跡の地図が示されているほか、壁画が出土した場所には、それを示す看板もたてられている。荒涼とした遺跡は、2750年以上の歴史と栄枯盛衰を強く印象づける。

# ルーダキー記念 歴史・郷土史博物館



タジキスタン共和国 ペンジケント

立正大学文学部 准教授  
(東洋史)、調査隊隊長

**岩本篤志**

専門は内陸アジア史、中国南北朝隋唐史。現地のビールはサルバストとバルティカ3がおすすめ。

ルーダキー記念歴史・郷土史博物館は、タジキスタン共和国ペンジケント市内にある歴史博物館である。ウズベキスタンを紹介する『ウズリス』の趣旨からは脱線するが、サマルカンドとの地域的、文化的関連性の強さから、本館を紹介しておきたい。

サマルカンドからペンジケントまでは車でわずか30分強の距離である。しかし、独立後のウズベキスタンとタジキスタンの関係は良好ではなく、行き来は容易でなかったが、2018年、両国大統領の合意によって電子ビザの取得のみで往来が可能となった。車両の乗り換えは必要だが、国境での手続きもスムーズになった。

博物館名に記念されるルーダキーとは、本誌の『シルクロードの秘密国：要衝ブハラ』の記事にも書いたサーマーン朝の詩人その人で、首都ドゥシャンベの目抜き通りに名前が用いられている。また彼の墓はペンジケントから比較的近いバンジルクタ村に発見されており、

本館にその名が冠される理由はそこにある。もちろん本館では彼に関しても、展示スペースが割かれている。

展示品として注目されるのは、ソグドの都城址ペンジケント遺跡からの出土品と紀元前4000～3000年頃の集落遺跡として世界遺産に登録されたサラズム遺跡からの出土品である。ただし、いずれも、複製品や模写が多く、実物の展示は必ずしも多いとはいえない。

ペンジケントからの出土品、とくに土器片については、ルーダキー記念博物館から車で数分の距離にあるペンジケントの丘の脇の小さな展示室にわりとたくさん展示されている。またとくに優れた逸品はサンクトペテルブルクのエルミタージュ美術館に展示されている。またサラズム遺跡からの出土品の主要なものはドゥシャンベのタジキスタン国立古代博物館に展示されている。

なおサラズム遺跡は、ここから車で数十分の場所にあり、2019年9月時点では展示室を新築中であった。したがっ



ルーダキー（博物館前の銅像）

て今後、ルーダキー記念博物館の展示のありようは変化していくにちがいない。本館は、ペンジケント周辺の発掘品や文化人について模写や複製品も用いて展示することで、この地域の歴史・文化を総合的に説明する役割を担っているといえる。

ウズベキスタンとタジキスタンの両国が、こうした文化遺産をうまく両国の発展につなげていってくれることを期待したい。



ペンジケント遺跡からザラフシャン川方面を望む



サラズム遺跡

## お知らせ

BSフジ『ガリレオX』（11月10日(日) AM11:30～12:00、再放送11月17日(日) AM11:30～12:00)「続・ウズベキスタンで仏教遺跡を探る」にて、本学調査隊の活動が紹介されました。なお、再々放送や報告会についてはホームページまたはFacebookに追って掲示します。今後とも立正大学の学術活動・地域貢献活動の展開にご注目ください。

文部科学省私学研究ブランディング事業は、本年度で最終年度となります。年度中にこれまでの成果に関する複数の報告書の刊行が予定されています。なお、立正大学ウズベキスタン学術調査隊の現地での活動は次年度以降も継続されます。本誌については、今後、刊行スケジュールや形態などについて再検討を行う予定です。



## 編集後記

『ウズリス』は、文部科学省私学研究ブランディング事業「立正大学ウズベキスタン学術交流プロジェクト」の広報誌です。立正大学ウズベキスタン学術調査隊の活動を通して、ウズベキスタンの文化や人びとを紹介します。私学研究ブランディング事業の広報誌としては、本号が最終号となります。活動は継続しますので、引き続き、ご声援のほどいただければ幸いです。

### 「立正大学ウズベキスタン学術交流プロジェクト」スタッフ

- ◇調査隊隊長 …… 安田治樹（仏教学部 教授）
- ◇調査隊副隊長 …… 池上 悟（文学部 教授）
- ◇プロジェクトリーダー …… 岩本篤志（文学部 准教授）
- ◇主管部局 …… 研究推進・地域連携センター／研究推進・地域連携課
- ◇関係部局 …… 広報課

### ウズベキスタン学術交流プロジェクトニュースレター

- ◇編集委員 …… 岩本篤志、紺野英二、手島一真

文部科学省 私学研究ブランディング事業  
「立正大学ウズベキスタン学術交流プロジェクト」

## ウズリス 第4号

2019年12月6日発行

編集・発行  
立正大学 ウズベキスタン学術交流プロジェクト  
ニュースレター編集委員会

〒141-8602  
東京都品川区大崎4-2-16  
立正大学 研究推進・地域連携課

<http://www.ris.ac.jp/branding/about.html>  
<https://www.facebook.com/RisshoUniv.Uzbekistan/shien@ris.ac.jp>

印刷 株式会社ダイヤモンド・グラフィック社



## ウズベキスタン・テルメズの歴史的建造物の紹介

私は、2019年に立正大学ウズベキスタン学術調査隊によるズルマラの仏塔の調査に参加しました。ここでは、調査期間中に見学をしたテルメズの修復された歴史的建造物の紹介をします。

最初は、テルメズ市内から北に約3kmの地点にあるナムナ集落の「Qirq Qiz Saroyi」という遺跡です。9世紀から10世紀ごろに築造された建物です。Qirq Qizというのは「40人の女性」、Saroyiというのは、宮殿という意味です。

建物の平面形は1辺約55mで、四方に高い壁と出入り口があります。日干しレンガで築造され、15世紀に焼成レンガで修復をされたようです。一部にはアーチ状に構築されたレンガの天井が遺されています。建物中央部には約10m四方の中庭があります。

建物の用途については、王の別荘であったとか、隊商宿であったとか、イスラム教の修道院であったといった説が提唱されていました。現在では、この

遺跡は女性がイスラム教のほか、数学、天文学を学んでいた神学校であったという説が定説になっているようです。

最近、建物の発掘調査が行われ、本来の床面の一部が確認されました。壁体からは、数回の火災の痕跡が認められています。現在は、焼き直した新しいレンガで修復が行われています。

次は、「Sulton Saodat Majmuasi」という建物群です。テルメズ市内から北に約8kmの地点にあります。11世紀から17世紀にかけて建築されました。

この霊廟には、イスラム教の預言者ムハンマドの子孫である、サイド・ハサン・アル・エミールとその一族が埋葬されています。この一族は、支配王朝が変わっても、テルメズの有力者として王朝と関わりを持っていたようです。子孫は付近の村に現在も住んでおり、霊廟で墓守をしています。

建物群の構成は、中央の通路の脇に、モスク、修道院、そして正面に霊廟が建てられています。建物群には、十数のレンガ造りの棺があります。建物は、正面の霊廟が11世紀築造と最も古く、15～17世紀にかけて新しい建

物が建てられました。

建物群は、かつてはサマルカンドのシャーヒ・ズィンダ廟群のように、霊廟の入り口はコバルトブルーにタイル張りされていたと思われます。しかし、2002年に大規模な修復が行われましたが、中央通路正面の霊廟の入り口を除き、そのような装飾は遺っていません。

これらの建物群は、建てられた時代や建築方法が異なるにも関わらず、建物の構造と装飾が同じです。そのため、600年の長きに渡って建築されたにも関わらず、建物同士の調和が見事です。

建物群の周囲には、復元されずにそのままになっている建物跡があります。この建物群の周囲には、付近に住む人々の墓地が営まれています。

Sulton Saodat Majmuasiでは、ウズベク語、ロシア語、英語の三ヶ国語の説明板が新しく設置されていました。

スルハンダリヤ州の遺跡は、多くが復元・修復を進められています。今回の調査では、ズルマラの仏塔にも日本人を始め各国の観光客が訪れており、テルメズもサマルカンドのような観光都市になる日も遠くはなさそうだと感じました。



Qirq Qizと修復の状態



Qirq Qizのレンガ



Sulton Saodatにてフェルガナよりお参りに来た女性たちとともに撮影